

## 山梨県産業集積促進助成金交付細則

この細則は、山梨県産業集積促進助成金交付要綱（以下「要綱」という。）の実施に関し必要な事項を定めるものとする。

### 第1条 用語の意義について

この細則における用語の意義は、要綱で使用する用語の例による。

### 第2条 増加する常時雇用労働者について

要綱第4条第1項第1号ウの増加する常時雇用労働者の数（以下「増加雇用労働者数」という。）には、県内既存工場等から移動した従業員は含めない。

ただし、新たな工場等に配属させることを目的として操業開始前に採用し、研修等のため県内既存工場等に配属させていた者であることを知事が認める者は増加雇用労働者数に含めるものとする。

- 2 前項の操業開始前とする採用期間は、要綱第5条第1項に規定する認定事業として知事の認定を受けた立地事業のために要する土地の取得日又は借地権の設定日から操業開始の日とする。

ただし、立地事業が要綱第4条第3号に該当する場合、当該立地事業の工場等の建設工事の開始日から操業開始の日とする。

- 3 立地事業を行う者の従業員であって、県外で雇用されていた者を県内の工場に移転させた場合には、増加雇用労働者数と認める。

### 第3条 県内から新たに雇用する者について

要綱第4条第1項第1号ウの県内から新たに雇用する者とは、本人が雇用される日を基準として、本人又は2親等以内の親族又は姻族が、引き続き3ヶ月以上山梨県内に住所を有している者とする。（操業開始前に採用した者であっても、新たな工場等に配属させることを目的として採用した者であることを知事が認める者を含む。）

- 2 前項の引き続き3ヶ月以上山梨県内に住所を有しているとは、山梨県内のいずれかの市町村の住民基本台帳に記録されている期間が3ヶ月以上であることとする。

### 第4条 市町村が別に定める助成制度について

要綱第4条第1項第1号エの助成制度とは、県が交付する助成金の額の5分の1以上の額を助成金として製造業等の立地事業を行う者に交付することとなる助成制度とする。

ただし、要綱における情報通信業等の立地事業、空き工場取得費及び本社機能移転等のうち要綱第10条第1項第3号3の要件に該当するものについては、この限りでない。

なお、所在市町村が、事業認定申請時に、当該助成制度を有していなくても、認

定事業者が操業を開始する日までに、当該助成制度を定める旨を所在市町村の長が確約した場合は、当該助成制度を有しているものとする。

- 2 要綱第4条第1項第1号エの助成制度が、立地事業の操業開始の日前までに定められていない場合には、当該立地事業について産業集積促進助成金の交付対象としないものとする。

#### 第5条 事業認定における取り扱いについて

要綱第4条の助成対象が複数項目で該当になる場合においては、立地事業で実施する業種が対象になるものを優先し、要綱第5条第1項の事業認定を行うものとする。

- 2 グループ企業間における空き工場等の取引や所有権変更がされ、設備等の導入がされた場合については、投下固定資産額及び雇用要件が満たされている場合においても、当事業の対象とはならない。
- 3 要綱第10条第1項第1号及び第3号の要件により事業認定を行う場合、空き工場取得費と機械設備の取得費の合計が要綱第4条第1項第1号イもしくは同条第1項第3号イの要件を超えるものを対象とする。
- 4 要綱第10条第1項第4号の要件により事業認定を行う場合、事業所の拡充により事業認定の申請がされる際には、立地事業に供される新事業所の面積から既存事業所の面積を減じた面積を新事業所の面積で除して得た割合を乗じて得た額を対象とする。

#### 第6条 再度の事業認定について

要綱第5条第1項の事業認定を再度受けようとする者は、前回認定を受けた事業の操業開始の日から3年を経過しなければ事業認定申請を行うことができないものとする。

#### 第7条 助成金の端数処理について

要綱第10条第1項各号に定める助成金の額の計算において、千円未満の端数が生じた場合には千円未満を切り捨てた額を助成金の額とする。

#### 第8条 複数年にわたって交付決定が必要な立地事業について

要綱第12条第2項における交付申請については、その年の12月末日までを対象とし、3月末日までに交付決定を受けるものとする。

#### 第9条 複数年にわたって交付決定が必要な立地事業において、途中で雇用要件を満たさなくなったときの扱いについて

複数年にわたって交付決定が必要な立地事業において、操業開始後1年以内に立地事業を行う事業者が、新規常用雇用者の要件（以下、雇用要件という。）を

満たして交付決定を受けた後に、従業員の自己都合による退職、偶発的な事由等により雇用要件を満たさなくなるときは、次の各号に定めるとおりの扱いとする。

- ( 1 ) 雇用要件を満たさなくなった数の新規常用雇用者を速やかに求人し、採用する意思があると認められる場合、引き続き雇用要件を満たしているものとして扱う。
- ( 2 ) 前号以外の場合であって、6ヶ月以内に再度雇用要件を満たすことが見込まれる場合、雇用要件を満たしていない期間における建物及び設備機器等の賃借料は、要綱第10条の助成対象に含まれないものとして扱う。
- ( 3 ) 雇用要件を満たさない期間が6ヶ月を超えることが見込まれる場合、要綱第6条第1項第2号に該当するものとして扱う。

#### 第10条 助成金の交付決定について

要綱第13条の交付決定は、交付申請があった後に予算の議決を経て行う。ただし、事業認定を行い、操業が確実な立地事業については、予算議決後に交付申請を受け、交付決定ができるものとする。

#### 第11条 助成金の支払請求の時期について

助成金の支払請求(様式第12号)は、要綱第13条の交付決定の通知を受けた日から起算して、15日以内に行わなければならない。

#### 第12条 ファイナンスリースの取り扱いについて

「リース取引に関する会計基準」(改正平成19年企業会計基準第13条)中「5」にいうファイナンスリース物件については、投下固定資産として取り扱うものとする。

ただし、リース期間終了後に所有権の移転を伴わないファイナンスリース物件であって、事実上、賃借と等しい使用形態となる条件が付されていると認められる場合には、賃借料による物件として扱うことができるものとする。

#### 第13条 要綱第17条第2項第1号の規定による助成金の返還について

要綱第17条第2項第1号の規定により助成金の返還を命ずる場合における助成金の返還額は、工場等の操業等の休止又は廃止をした際現に存する投下固定資産に係る残存簿価に相当する価格(当該投下固定資産について鑑定評価がされた場合にあっては、当該残存簿価に相当する価格と当該鑑定評価により得られた鑑定評価額とのいずれか高い額)に助成率(交付に係る助成金の額を要綱第10条の規定による助成金の算定の対象となった投下固定資産額(千円未満切り捨て)で除して得た割合をいう。以下同じ。)を乗じて得た額とする。

#### 第14条 要綱第17条第2項第2号の規定による助成金の返還について

要綱第17条第2項第2号に規定する「処分」とは、転用（助成金の交付の目的に反した使用をいう。）、譲渡、貸付け、担保権の実行、交換、取壊し及び廃棄をいう。

2 要綱第17条第2項第2号の規定により助成金の返還を命ずる場合における助成金の返還額は、次の（1）又は（2）に掲げる場合の区分に応じ、当該（1）又は（2）に定める額とする。

- （1）投下固定資産について、有償による譲渡若しくは貸付け又は担保権の実行をしたとき。当該投下固定資産に係る助成金相当額を上限として当該投下固定資産の譲渡価格又は貸付額に助成率を乗じて得た額。ただし、当該譲渡価格又は貸付額が当該投下固定資産を処分した時点における当該投下固定資産に係る残存簿価に相当する価格（当該投下固定資産について鑑定評価がされた場合にあっては、当該鑑定評価により得られた鑑定評価額）に比して著しく低い場合において、その理由を合理的に説明することができないときは、当該投下固定資産に係る残存簿価に相当する価格（当該投下固定資産について鑑定評価がされた場合にあっては、当該鑑定評価により得られた鑑定評価額）に助成率を乗じて得た額とする。
- （2）投下固定資産について、転用、無償による譲渡若しくは貸付け、交換、取壊し又は廃棄をしたとき。当該投下固定資産を処分した時点における当該投下固定資産に係る残存簿価に相当する価格（当該投下固定資産について鑑定評価がされた場合にあっては、当該残存簿価に相当する価格と当該鑑定評価により得られた鑑定評価額とのいずれか高い額）に助成率を乗じて得た額

#### 第15条 要綱第17条第2項の規定による助成金の返還の命令を行わない場合について

次のいずれかに該当する場合は、要綱第17条第2項の規定による助成金の返還の命令は、行わないものとする。

- （1）投下固定資産を処分したことにより、活力ある産業集積の促進及び雇用機会の拡大が図られると知事が認めるとき。
- （2）減価償却資産の耐用年数等に関する省令（昭和40年大蔵省令第15号）に定める耐用年数を経過した投下固定資産を処分したとき。
- （3）災害により損傷した投下固定資産を処分したとき又は災害により工場等の操業等の休止若しくは廃止を余儀なくされたとき。

#### 第16条 休止等の事前協議について

要綱第19条に規定する「あらかじめ」とは、正当な理由がある場合を除き、協議事項を実施しようとする30日前までとする。

2 要綱第19条第3号で規定する「処分」とは、要綱第17条第2項第2号に規定する「処分」及び担保の設定をいう。

## 第 17 条 計算

要綱における期間の計算又は親等の計算は民法の例による。

第 18 条 この細則に疑義が生じた場合は、知事が別に定める。

### 附 則

( 施行期日 )

1 この細則は、平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

( 経過措置 )

2 この細則は、平成 31 年 3 月 31 日限り、その効力を失う。

ただし、同日までに要綱第 5 条に定める事業認定を受け、かつ、土地又は借地権を取得済の者については、この細則は、同日以後も、なおその効力を有する。

### 附 則

この細則は、平成 20 年 4 月 1 日から施行する。

### 附 則

この細則は、平成 23 年 4 月 1 日から施行する。

### 附 則

この細則は、平成 24 年 7 月 27 日から施行する。

### 附 則

この細則は、平成 27 年 1 月 23 日から施行する。

### 附 則

この細則は、平成 28 年 3 月 31 日から施行する。